

ウクライナ マロニエ

(別名セイヨウトチノキ、トチノキ科トチノキ属)

Aesculus hippocastanum



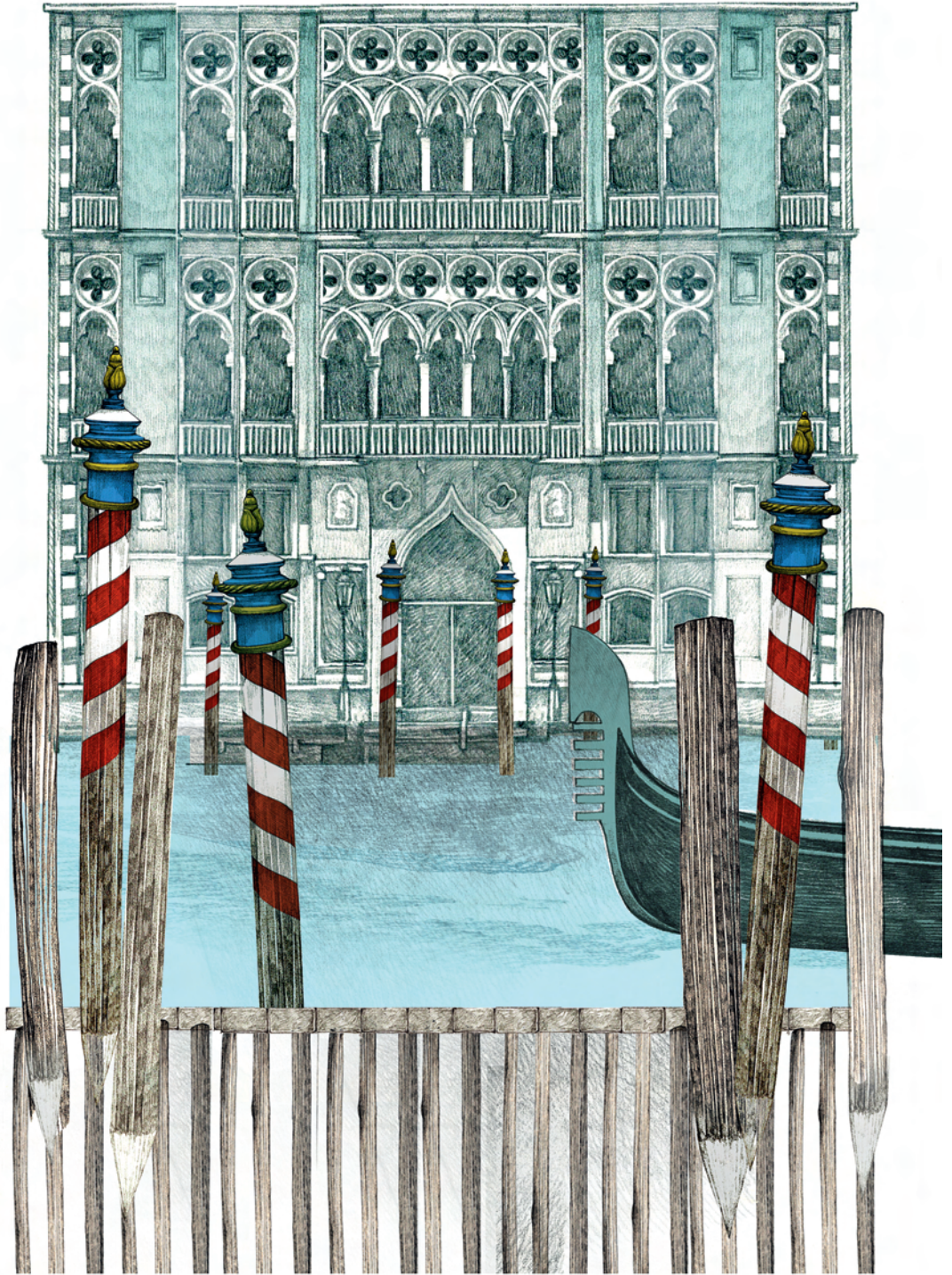
マロニエは、自生地のギリシャやバルカン半島中部ではめっきり少なくなりましたが、何百年も前から造園家や都市計画者に愛されてきたおかげで、世界中の温暖な気候の都市の公園や大通りで存分に見ることができます。

ウクライナの首都キエフでは19世紀初頭にマロニエを植えることが流行して以来、その熱は冷めることなく続いていて、観光用のパンフレットにはマロニエを楽しむならキエフが最高と書かれています。実際、マロニエはキエフじゅうにあります。幹と枝はがっしりしていて、樹形は典型的には釣鐘型です。早春に枝先に出るベタベタした芽は、5月には5枚か7枚の小葉が扇状になった葉になり、華麗な花のキャンドルが立ち上がり、木は巨大な枝付き燭台のようになります。花は観光客と送粉者を引き寄せます。ミツバチは木から木へと花粉を運び、その見返りにエネルギーになる蜜をもらいます。蜜を吸われた花は色を黄色からオレンジ色、深紅色へと変え、勤勉なミツバチにほかの花にいくように教えます。この魅力的な相利共生関係のおかげで、マロニエは授粉の必要がある花の蜜を作ることに専念でき、ミツバチは無駄足を踏まずにすむのです。

マロニエの果実は棘に覆われた蒴果で、熟して割れると、中から大きくツヤツヤした茶色い種子が顔を出します。マロニエの種子は英語で「conker」と言いますが、英国の子どもたちはこれを使って「コンカーズ」という遊びをします。コンカーに穴をあけて靴紐を通し、紐を振り回してぶつけ合い、相手のコンカーを割るのです。ゲームのポイントは、紐が絡まってしまったときの得点ルールをめぐる高度な交渉と、コンカーを割れにくくするためにこっそり焼いたり酢に漬けたりなどはしていないと真剣に主張するところにあります。

マロニエは幼年時代の楽しい遊びを思い出させてくれる一方で、否応なしにヨーロッパの暗黒の時代も振り返らせます。第二次世界大戦中、アンネ・フランクが隠れ住んでいたアムステルダムの屋根裏部屋の窓からはマロニエを見ることができました。彼女は日記に、冬に葉が落ちて春になれば再び緑になるのだと希望の言葉を書きました。残念ながら、彼女は裏切られ、生き延びることはできませんでした。けれども2010年にこのマロニエが枯れたとき、その種子から苗木が育てられ、希望のしるしとして、そして、相互に理解し多様性に敬意を表する社会への願いの象徴として、各地に配布されました。





イタリア

ヨーロッパハンノキ

(カバノキ科ハンノキ属)

Alnus glutinosa



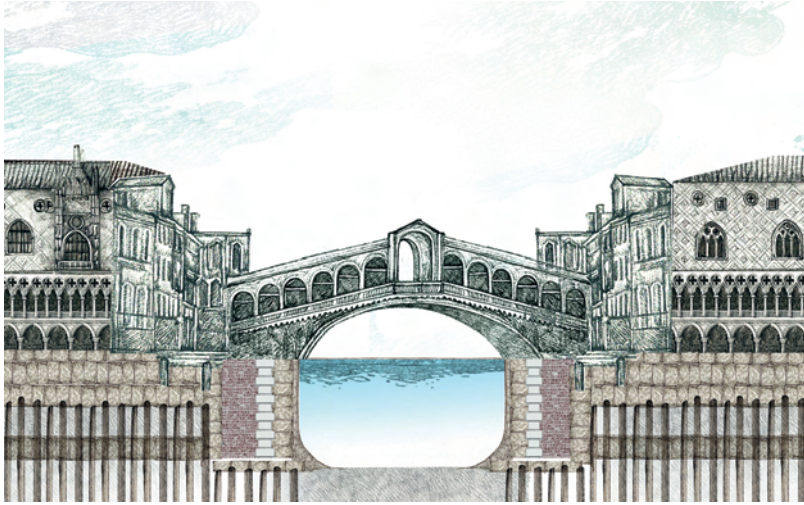
ヨーロッパハンノキは、一見、特徴がなさそうな木です。もちろん、紫色の芽や、だらりと垂れ下がる尾状花序は、花屋のお気に入りです。暗緑色の葉はラケット型で、先端は尖っておらず、逆にV字型の切れ込みがあります。種小名の「*glutinosa*」は「ねばねばした」という意味ですが、これは、若い小枝がベタベタしていることに由来しています。そんな感じの地味な植物ですが、実は、見た目からはわからない大きな特徴を持っています。

ハンノキは水が大好きで、川の土手や水に漬かったような場所でよく育ちます。樹木としては珍しく、窒素固定細菌と共生関係にあります。細菌が木の根に侵入して作るこぶ状の根粒は、ときにリンゴほどの大きさになります。ハンノキが水浸しのやせた土地に進出し、繁茂することができるのは、細菌が木から糖をもらう代わりに肥料を作っているからです。

建材としてのハンノキは、水と特別な関係にあります。12世紀、多くの小さな島々からなるヴェネツィアの住民たちが湿地に建てた家を安定させ、広げようとしたときに、水門に大量のハンノキ材が使われていることに目をとめました。ハンノキ材は、濡れた状態で空気に触れているとたちまち腐ってしましますが、完全に水没していれば腐らず、何百年間も大きな圧縮荷重に耐えることができます。細胞壁に含まれる化学物質が、腐敗を引き起こす細菌の広がりを食い止めるからです。ハンノキ材の基礎杭で巨大建築を支えられることに気づいたヴェネツィアの人々は、大胆にも干潟に夢の都市を築き上げました。

ヴェネツィアの技術者たちは、計画的に小さな範囲を壁で仕切って排水することにより、1m²あたり約9本の杭を打ち込みました。杭の下部は泥の下の底土に届き、上部は最低の潮位よりも低くなっています。次に、杭の周囲や間に砕いたれんがや石を敷き詰め、その上にカラマツの厚板をのせて、さらにその上に積まれる石の重みを分散させます。最大の建築物の基礎にはもっと太いオークの杭が必要でしたが、リアルト橋や多くの巨大な鐘楼を始めとするヴェネツィアの建築物のほとんどが、文字どおりハンノキの森の上に築かれました。

ハンノキはこうしてヴェネツィアの権勢を誇示する華麗な建築の基礎となったのですが、そもそもハンノキがなかったら、この都市国家が軍事超大国になることはなかったかもしれません。ハンノキからは最高級の炭ができますが、この炭は粉末化しやすく、並外れて硬く、戦略的重要性が非常に高いのです。ハンノキ炭を原料にした火薬を使うと、弾丸をより遠くまで、より高速に発射することが



でき、爆発力の強い手榴弾や発破を作ることができました。今日でも、最高品質の火薬にはハンノキの炭が使われています。

道具や船舶の部品を作るのに欠かせない鉄を製錬するのにも、炭が生み出す高温が必要でした。14世紀末には、ヴェネツィアの鑄造所地帯にはハンノキ炭を燃料とする世界最高効率の製錬所がいくつもありました（ちなみにこの地域は「^{ゲットー}getto」と呼ばれていて、のちにユダヤ人居住区になったため、やがてユダヤ人居住区全般が「^{ゲットー}ghetto」と呼ばれるようになりました）。ヴェネツィアの造船所は世界最大の工場になっていました。生産ラインでは1万6,000人の労働者が働き、1日1隻という驚異的なペースでフル装備の外洋船を建造していました。商業と軍事力に支えられた中世ヴェネツィアは、今日のロマンチックなテーマパークのような都市とはかけ離れたところだったのです。

ヴェネツィアはあらゆる種類の木材を欲しがりました。ハンノキはもちろん、最大の杭と船にするためのオークや、^{かい}樅にするためのブナのほか、調理や暖房に使う膨大な量の安価な木材を確保するためには、木材の供給を厳格に管理しなければなりません。本土の広大な森林が国の利用のために確保され、16世紀中頃には大勢の調査官や地図製作者や森林保護官がいて、特に貴重な木には焼印まで押していました。きこりや木挽や、^{こびき}干潟の水路を通して市場まで木材を運ぶいかだ乗りのギルドの仕事は厳しく監視されていました。

それぞれの木材に役割がありましたが、商船や軍艦の装備を鍛造する炎を生み出し、大砲の火薬の原料になったのはハンノキの炭でした。船を建造する職人の住居を支えたのもハンノキの杭でした。それから約700年が経過した今でも、ハンノキの杭は「海に浮かぶ街」の壮麗な建物と観光客を支えています。